

Title	エコツーリズム推進における適地性と発展プロセスの比較研究
Author(s)	沓掛, 博光; 敷田, 麻実
Citation	日本観光研究学会全国大会学術論文集, 23: 201-204
Issue Date	2008-11
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16832
Rights	本著作物は日本観光研究学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Institute of Tourism Research. Copyright (C) 2008 日本観光研究学会. 沓掛 博光, 敷田麻実, 第23回日本観光研究学会全国大会学術論文集, 2008, pp.201-204.
Description	

エコツーリズム推進における適地性と発展プロセスの比較研究

Difference in Feasibility and Development Process of Two Ecotourism Destinations

沓掛 博光* 敷田 麻実**

KUTSUKAKE Hiromitsu SHIKDA Asami

本研究では滋賀県高島市新旭町針江地区と長野県信濃町を比較し、異なる立地や従来の観光の状態の差が「エコツーリズム」の開始と推進にどのように影響したのかを分析する。高島市針江地区は2004年のNHKのTV番組「映像詩 里山 命を巡る水辺」で紹介されて来訪者が増え、信濃町はスキーや野尻湖などの観光の停滞に対して、町の活性化と新しい資源による観光需要の喚起による観光客の増加が求められていた。針江地区は偶然にTVで紹介されたことから来訪者が増え、信濃町は観光地再生のために意図を持って観光資源の開拓に取り組んできた。本研究では、2地域の比較からエコツーリズムの適地性および地域貢献性、またそれを可能にする仕組みの発展について分析した。

キーワード:地域主導の観光、エコツーリズム、発展プロセス、適地性

1. 研究対象地域の概要

(1) 滋賀県高島市新旭町針江地区

高島市は滋賀県の北西部、琵琶湖の西岸に位置し、面積は約51,100ha、人口は約5万3,900人(2005年国勢調査)。研究対象の高島市新旭町針江地区(以下「針江地区」という)は、高島市中央部の東側、琵琶湖畔に近い東西、南北各2kmの範囲にあり、世帯数は227戸で、人口は721人である(2005年国勢調査)。

地区内は安曇川の伏流水による湧水が豊富で、庭先や台所に設けられた「川端(かばた)」と呼ばれる水場に湧水を引いて飲み水・料理・野菜洗いなどに利用している。針江地区では、227戸のうち107戸(47%)が庭先や台所に川端を設けている。

NHKの番組「映像詩 里山 命を巡る水辺」が2004年に、この川端と共に暮らす人々の日常を紹介し、観光客が増えた。また、同地区は2007年に第3回エコツーリズム大賞特別賞を受賞した。最寄り駅はJR湖西線新旭駅で、京都駅から普通電車で約1時間である。

(2) 長野県信濃町

信濃町は長野県の北端、新潟県境に位置し、付近には大正時代からの国際的な別荘地で知られる野尻湖、スキー場の黒姫高原、俳人小林一茶のふる里柏原などがある。面積は1万4,927haで、この内、森林面積が1万956haと全体の約73%を占める。2006年には、林野庁より第1期の森林セラピー基地に認定された。人口は9,910人(2008年信濃町調べ)。長野駅から信越線普通

で30分の黒姫駅が最寄り駅である。

2. 対象地域の観光の現況

(1) 観光施設

1) 滋賀県高島市新旭町針江地区

旧新旭町には、既存の観光施設として道の駅「しんあさひ風車村」があり、「新旭花しょうぶ園」、レストラン「アイリス」などを併設している。他に、食事処「かばた館」、「新旭水鳥観察センター」、「六ツ矢崎浜オートキャンプ場」がある。針江地区にしぼってみると、既存の観光施設はなく、2007年に空き家を利用した宿泊施設「生水の生活体験処」(1泊3,000円)が開設した。

2) 長野県信濃町(以下信濃町)

野尻湖及び湖畔の野尻湖国際村、野尻湖ナウマン象博物館、黒姫高原スキー場、小林一茶旧家、一茶記念館、黒姫高原コスモス園などの施設がある。中でも野尻湖国際村は、大正10年ごろに開設され、我が国の別荘地の草分け的存在である。

(2) 具体的な観光振興の内容

1) 針江地区

2004年1月にNHKハイビジョン放送、4月に同総合テレビで放映され、全国から針江地区に観光客が訪れるようになった。彼らの関心の1つは、針江地区の湧水であり、湧水を見学するために住民の生活の場に入り込む事例が増えた。そのため2004年5月に防犯やプライバシー保護、ごみ処理などの観点から、当初、

地区内の 28 名の住民が「針江生水の郷委員会」を結成した。この委員会は、会長などで構成される役員会と部会(総合案内、環境整備、企画、事務局・広報、イベント、会計)からなる。委員は針江地区の住民であり、その職種は多様である。また一般の会員は会社員、自営業(商業、農業)主婦など住民が中心である。行政、農業諸団体からの参加はない。なお、会員の平均年齢は 50 歳前後である。現在(2008 年 9 月)は 70 名の住民が参加しており、地区に居住する住民の 9.7%が加入していることになる。

委員会では、最初は無償で観光客を案内していたが、現在は有料で 1 ヶ月に 2 回、路線バスを利用した定期ツアーを実施している。また、個人観光客向けのショートツアーも行っている。今までのツアーの実績は表-1 に示した。2005 年の 1,119 人から現在まで観光客の受入数は毎年増加している。

表-1 滋賀県針江地区におけるツアーの実績

月	2005 年		2006		2007		2008	
	かばた見学	定期ツアー	かばた見学	定期ツアー	かばた見学	定期ツアー	かばた見学	定期ツアー
1	0	0	63	2	112	3	144	0
2	0	0	72	0	233	7	306	0
3	14	19	95	0	175	42	421	8
4	21	34	139	21	279	21	435	33
5	157	42	282	32	328	26	590	40
6	179	32	411	38	491	78	826	49
7	62	34	290	41	952	11		
8	109	22	437	35	829	14		
9	31	28	355	68	910	65		
10	131	92	354	58	853	76		
11	50	30	369	54	621	24		
12	29	3	124	3	160	0		
計	783	336	2,991	352	5,943	367	2,722	130
年計	1,119 人		3,343		6,310		2,852	

定期ツアーは、事前申し込みにより集客し、毎月第 2 および 4 土曜日に実施。コースは、JR 湖西線新旭駅より路線バスで針江に入り、現地では徒歩でボランティアガイドがついて案内する。ツアーの特徴としては、地域の食材による食事や「よし笛演奏」も行われる。所要約は 3 時間 30 分である。料金は 1 人 2,500 円(小中学生 1,500 円)で、路線バス代、保険料、ガイドの案内、地元の食材を使った料理、お土産が含まれている。

一方、ショートツアーの場合は 1 人 1,000 円であり、ガイドへの謝礼は 1 回につき 1,000 円。観光客を受け入れてくれる家への協力金 2,000 円程度(1 ヶ月)である。またガイド謝礼、協力金などの支払いは、すべて高

島市の地域通貨「アイカ」で支払われている。

針江地区では、「お客さんを締め出すのではなく、どう案内したらいいか。他所の観光地と同じことをしてもうまくいかない(美濃部武彦生水の郷委員会会長)との考えで、新旭町役場(合併前、当時)に相談した。そして委員会の役員たちは「エコツーリズム」という観光の方法を知った。同時に、訪れた観光客との交流の中で、湧水が「素晴らしい宝であること」を実感し、水と共に暮らす針江地区の日常の暮らしぶりを見て、楽しんでもらうツアーを企画した。その実施主体は針江生水の郷委員会である。

2) 信濃町

信濃町では、1996 年に地元の有志が自然資源を生かしたまちづくりをめざして組織づくりを始めた。この時の組織が母体となって、長野県と地元信濃町の行政も参加した官民による活動が始まった。それは町の面積の約 70%を占める森林資源を維持しながら活用するという、地域資源の「持続的な利用」と新しい観光需要の開拓、観光と農業をリンクさせた地域経済への貢献、住民の参加によるまちづくりを目指していた。その活動プロセスは以下の通りである。

2001 年 12 月に、自然観察指導員やペンションオーナーらが中心になり「トマトの会」を結成した。信濃町を合併に頼らず「自立した日本一の町」にしようという目標を掲げ、新しい観光資源を発見する「まちおこし」を目的とした。彼らの当初の目的は、信濃町を囲む森林を生かした事業の推進、農業振興につながるプランづくり、地産地消の実践、であった。そして「トマトの会」のメンバー 6 人が 2003 年 3 月に、「緑の環境産業創造プロジェクト」構想に関する県からの支援について前向きな反応を得た。

そして同年 11 月メンバー 20 名と町役場が、「癒しの森事業推進委員会(以下「推進委員会」という)を設立した(表-2)。推進委員会は前述した県のプロジェクトの中に位置づけられる「エコメディカル&ヒーリングビレッジ事業」を基本構想にして、「癒しの森事業」を開始した。その目標は、健康増進、心身のケアを求める都市住民と地域資源である森林とのリンク、スキーリゾートとしてのノウハウを持つ宿泊施設との融合、各種体験学習に秀でたトレーナーの活躍の場の提供、地域農産物の活用、森林療法先進地、独・バートウェーリスホーフェン市をモデルとした医療と連携した森林療法保養地を目指す、である。また森林の

「癒し機能」と観光、農林業、地域医療を結びつけ、交流人口の拡大と地域活性化を目的とした。

表-2 癒しの森事業推進委員会の構成

農水産関係	JA ながの農業協同組合 信濃町支所
	認定農業者協議会
	生活改善協議会
	信濃町食生活改善会
	道の駅しなのふるさと天望館 野尻湖漁業協同組合
酪農関係	JA ながの酪農部会信濃町支所
商工業関係	商工会または青年部
林業関係	信濃町林業研究グループ
	長野森林組合
観光協会	癒しの森推進部関係
各種のスタッフ	県草草指導員 県自然観察のスタッフ
	信濃町森林療法研究会-ひとときの会-
学識経験者	環境省自然公園指導員
	黒姫和漢薬研究所
事務局関係	農林癒しの森係
	町づくり財団信濃町づくり推進係
	商工観光課
	保健福祉課 保健予防係
顧問	信越病院
	東京農業大学 准教授

(信濃町農林課癒しの森係資料から)

推進委員会は2003年に120万円(県60万円、町60万円負担)の予算で人材育成事業から着手した。森林をガイドし森林療法を指導するメディカルトレーナーと癒しの森の宿の育成を図ることが目的だった。

実際にスタートすると、当初の予想の30人を大きく上回る80人が参加した。中には「まちづくりを手伝いたい」、「何か町に役立つことをしたい」という主婦の参加もあった。

2008年9月現在のメディカルトレーナー登録数は150人(総人口の1.5%)であり、平均年齢は40代後半である。その内訳は、職種観光関係者70%、一般住民30%である。なお、癒しの森事業にかかわる宿泊施設は35軒で、これは町内の全宿泊施設数の29%にあたる。

メディカルトレーナーによるツアープログラムの主なコースは、2008年現在以下の通りである。また料金は、1泊2食(トレーナー料金・保険代含む)で1人利用が2万500円である。ツアーでは、黒姫童話の森(御鹿池)コース(1.2キロ、徒歩1時間30分)、象の小径(野尻湖)コース(2.5キロ、同1時間)、地震滝(日本の滝百選)コース(7キロ、同4時間30分)などが用意されている。

一方、信濃町のエコツーリズムは、次のような経過をたどっている。まず、信濃町の観光客数は1997年を境に減少傾向であり、実際2002年に118万人だった観光客は2006年には91万人に減少した。それまで信濃町では、野尻湖周辺の従来の観光施設やスキー場を代表とする「自然を活用した観光」に力を入れてきたが、

観光客数の減少は明らかだった。

そこで地元有志が野外活動の組織を母体に新組織を作り、地域住民が身近に感じ、町の面積の約70%を占める森林を活用した地域再生と振興を目指した。

その内容は、行政に先駆けての地域住民による組織作りと人材育成、森林内での活動プログラムの作成、芳香浴や地産地消による郷土料理を出す癒しの森の宿づくりなど地域の宿との連携、観光客が利用する宿やレストラン、商店へ食材提供する農業との連携、町立病院との連携、自然保護とプログラムの質の維持のため利用者数に制限を設定(1グループ最大5人まで)などがあげられる。こうした持続可能な地域づくりのためのエコツーリズムの推進は「エコツーリズムの理念」や望ましい推進方向に沿うと考えられる¹⁾。

エコツーリズム事業への観光客の参加人数は、2005年500人だったが、2007年には1,800人に増加した。また企業や健保組合との契約も獲得でき、安定的に顧客を確保できる見通しも立ち始めている。このような状況もあり、推進委員会では癒しの森事業のさらなる促進を検討している。

3. 対象地域における観光の効果の評価

1) 針江地区

針江地区の民家に備わっている「川端」は水を生かし、水を地域に巡らせていく暮らしの原点になっている。この暮らしのための基本資源となっている「水」を地域住民が利用しながら、同時に守るという従来の生活スタイルを維持することがまず基本である。

しかしその一方で、水資源の保全には以前とは異なる状況も生まれてきている。例えば、針江大川の清掃を年4回、地域の住民が行っているが、この2、3年は地域外からの参加が見られ、水質浄化などに役立つ琵琶湖畔のヨシ刈りも同様に県内外のボランティアによって行われている。従来の共同体依存から、ボランティアなどとの自由なかかわりが時間の経過と共に発生し、基本資源の保護が来訪者によっても支えられている。

また針江地区では、川端などの水資源の保全に観光客の経済的な支援も生かされている。それは、水の恵みの豊かさを観光客に享受してもらい、その代わりに彼らから得られる収入を、地区の環境整備などに活用することである。

そして観光客が針江地区に来ることで子供、お年寄りが元気になるという観光による地域再生の効果も生

まれている。以上のような変化は、現地での聞き取り調査でいくつか確認されている。例えば、「飲める水が今も湧き出していることにお客さんが驚き、それを見てこちらの方もこの水が我々の宝であることを知らされた」、「韓国の研究者がやって来て(NHK の番組は韓国、オーストラリアなど世界 20 개국で放送された)庭先から水が湧き、水路を流れ、川に注ぐ一連の水を巡る風景を見て感激していた。この風景を守っていきいたい」、「観光客が増えたことで、家の前を以前より丁寧に清掃し、町がきれいになった」、「お客さんと話すので、年寄りも元気になったし、所帯を持った若い者もこの町を出て行かないから他の地区と比べ子供が多く、少子化はない」、「行政の経済的、人的支援など受けずにやっているから続けられるのではないか」、「会員でなくても針江地区の住民が案内など手伝ってくれる」などの意見が確認できた。

以上のように、地域資源を商品化して、観光客を受け入れ、そこから保全費用や地域再生への還元を見いだすことは、敷田・森重の「中間システム」²⁾でうまく説明できる(図-1)。つまり、湧水を活かしてツアーを生み出し()それを地域外に PR し()観光客を受け入れ()それを地域資源の保全や、地域資源にかんする誇りの回復、気づき、また一部は針江生水の郷委員会の活動や組織維持のために活かしている()。

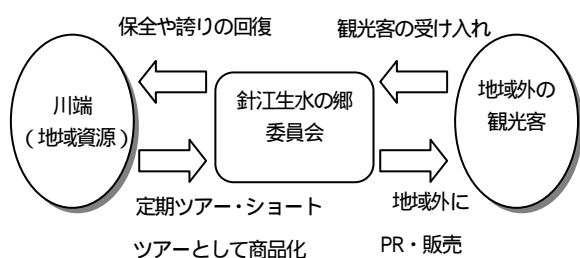


図-1 針江地区のエコツーリズムの仕組み

2) 信濃町

調査に基づく「癒しの森事業」の観光の経済効果は明らかではないが、聞き取り調査では、御鹿池コースに近い文学関連の童話館の入館者数が、2008年現在前年同期で約2700人増加した、上信越道信濃町ICに近い「道の駅しなの」で、地元野菜の売り上げが前年同期15%増加した、信濃町の「癒しの森事業」を推進する姿勢と豊かな自然に共鳴した医師が赴任し、町立信越病院の常勤医師数が6名増加した、などが認められる。

5. 結論

針江地区と信濃町はそれぞれ異なった立地、観光の推進プロセスを持ちながらも、エコツーリズムの推進を可能にした共通する要因を持っている。それは、豊かな自然環境という地域資源、その資源を活用する住民が参加した組織、ツアープログラムによる地域資源の活用、活動への日常的支援と地域住民の参加のしやすさ、観光客の増加による利益の地域資源への還元と組織が活動しうる程度の経済貢献が行われていることである。これは図-1で示したことと一致する。

同様に信濃町についても、地域資源と地域外の観光客を結びつける存在として信濃町役場と癒しの森事業推進委員会があり、地域外の観光客を受け入れ地域資源の充実や地域経営に還元している。

なお両地域とも、信濃町が企業や健保組合との取引を持っている以外は、地域外の旅行会社との取引はなく、図-1の から のプロセスを地域内の主体が主導しているので、「自律的観光」とであると考えられる。

エコツーリズムはバランスのとれた環境保全、観光振興、地域振興の実現をめざしているが、そのバランスは地域によって様々であり、重要なことは地域が主体的にそれを決定することである³⁾。この視点で本研究の対象地地区を捉えると、針江地区では自然保護と地域文化、信濃町では地域振興にそれぞれ力点が置かれていた。

本研究で対象とした、針江・信濃町両地域のエコツーリズムの推進は、条件や立地が異なるが、上記の から で指摘した共通点が明らかであり、地域資源への還元によって、自律的観光としてのエコツーリズムが持続可能な地域を創出する可能性を示唆している。今後の調査、研究においてはエコツーリズムの地域への還元の仕組みをさらに明らかにしていきたい。

謝辞:本研究は高島市役所商工観光課、針江生水の郷委員会、信濃町農林課及び関係各位にご協力頂いたことに感謝の意を表したい。

【参考文献】

- 1) エコツーリズム推進協議会(1999), エコツーリズムの世紀へ, エコツーリズム推進協議会, 319p.
- 2) 敷田麻実・森重昌之(2008): 持続可能な観光における地域内外の関係性モデルの提案, 日本観光研究学会 2008 年度ポスターセッション(於: 立教大学).
- 3) 敷田麻実編・森重昌之・高木晴光・宮本英樹(2008): 地域からのエコツーリズム - 観光・交流による持続可能な地域づくり, 学芸出版社, 208p.